古代ギリシアにおける異文化理解の諸相（3）
—ヘロドトスとエジプト—

中澤　務 *

Aspects of Cross-cultural Understanding in Ancient Greek 3: Herodotus and Egypt

Tsutomu NAKAZAWA*

[Abstract]

This study investigates the characteristics of the descriptions of Egypt by the ancient Greek historian, Herodotus, in Book 2 of his History. Ancient Greeks understood non-Greek cultures through the concept of "otherness." Herodotus also characterized other cultures to his readers through many techniques dubbed "the rhetoric of otherness." The most typical and important examples are his descriptions of the Scythians in Book 4 and Egyptians in Book 2. In Book 2, Herodotus describes the geography of Egypt, the habits of the Egyptians, and the history of the Egyptian dynasty. I point out two typical characteristics of his descriptions of Egypt in comparison with those of Scythia. First, his investigation of Egypt is motivated by his geographical interest that he inherited from the intellectual tradition of Ionic culture. Second, the reason behind his investigation of Egyptian culture is to understand the identity of Greek culture.

* 関西大学文学部（Faculty of Letters, Kansai University, Japan）

1 はじめに

ヘロドトスの論考は、紀元前5世紀の知的風土の中で誕生したものであり、それを如実に反映したものといえる。そこには、この時代における異文化に対するイメージと、ギリシア人たちの自己認識が反映しており、これを明らかにすることで、われわれは、紀元前5世紀におけるギリシア人の異文化理解の特質を解明することができる。

前号[1]において、われわれは、ヘロドトスの記述をめぐるアルトークの議論[2]に基づいて、その特質を検討した。具体的には、『歴史』第四巻における、スキュティアの文化に対するヘロドトスの議論に焦点をあて、その特質を検討した。今号では、前号の議論を踏まえ、『歴史』第2巻におけるヘロドトスの異文化理解の特質を検討したい。

『歴史』第2巻は、『歴史』のなかでも独立的要素の高い巻であり、おそらくは、『歴史』が編成される以前に、独立した「エジプト誌」としてまとめられたものであり、後に『歴史』のなかに組み入れられたものと推測されている[3]。

それは、ヘロドトスが、ハリカルナッソスを離れたあと、エジプトを調査した結果と考えられ、ヘロドトスの原型的な関心と視点が現れていると考えられる。そこには、スキュティアに対する態度とは異なる特徴が現れており、紀元前5世紀における知的風土が反映されていると考えられる。

そこで、本稿では、この『歴史』第2巻を素材として、紀元前5世紀における異文化を見る視点と、その背後にある紀元前5世紀の知的風土について考察したい。

2 ヘロドトスにおける異文化理解の特徴

2.1 ヘロドトスの知的風土

まずは、ヘロドトスに影響を与えた紀元前5世紀の知的風土と、その反映である彼のスキュティアの記述の手法を簡潔にまとめておく。

ヘロドトスが生まれたのは、紀元前485年前後のハリカルナッソスであった。この都市は、ドーリス系の植民市であったが、周辺のドーリス系諸都市とは異質な面の多い都市であり、非ギリシア系の民族との通婚も行われていた。ヘロドトスもまた、非ギリシア人の血が混じっていたと考えられ、彼の背後にある知的風土の多文化性をうかがい知ることができる。彼は、僭主リュグダミスに対する叛乱に加担して、サモス島で亡命生活を送った後、ペルシアやエジプトなど各地を旅行し、活動した。アテナイにも滞在し、

---

[1] 中澤務「古代ギリシアにおける異文化理解の諸相（2）—ヘロドトスとスキュティア—」、*The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture, Volume* 3(2015)、pp. 223-236。
[2] François Hartog, *Le Miroir d'Hérodote: Essai sur la Prerésentation de l'autre*, Gallimard, 1980.
[3] 藤縄謙三『歴史の父ヘロドトス』、新潮社、1989年、172頁は、独立的著作とするヤコービなどに反対しており、ペルシア戦争との関連があるとしているが、やはり独立的著作と考えるべきだろう。

最終的にはアテナイが建設した植民市トゥリオイに移住し、その市民として一生を終えたと考えられる。

ヘロドトスは、その生涯のある時期に、地中海世界の各地を旅行し、その文化や土地を調査し、そこに伝わる伝承や習慣を記録していった。ヘロドトス自身が、みずからの活動については何も語っていないがゆえに、われわれは、彼の調査旅行の時期や旅程などについては、ほとんど知ることはできない。しかし、彼の活動が、紀元前6世紀以降のイオニア世界に発生した、世界に対する地理学的・民俗学的関心の高まりの延長線上にあるものであり、紀元前5世紀の知的風土の中に位置づけられるものであることは、明らかであるように思われる[4]。

2.2 ヘロドトスとスキュティア

ヘロドトスの異文化記述の手法は、アルトークによれば、「他者のレトリック」である。それは、異文化を、自文化を映し出す「鏡」として利用する方法である。前号では、このようなヘロドトスの異文化理解の特質を、スキュティアの記述をもとに考察した。

スキュティアは、ホメロスの時代から存在が知られていた地域であり、すでにヘシオドスの時代には、その土地の状況もよく知られていた（『神統記』339-345）。古代ギリシア人にとって、スキュティアは、世界の果てにある辺境地帯であり、ギリシア世界の対極にある世界と考えられていた。ヘロドトスは、そうしたスキュティアの文化を、みずからの文化の鏡として理解し、その対極性のなかに、ギリシアの姿を映し出そうとしている。

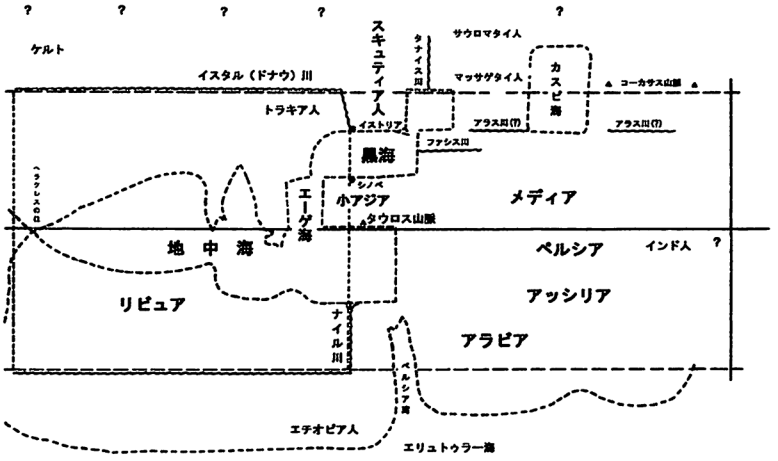
まず、ギリシアとスキュティアは、中心と辺境という対立軸によって対比される。ヘロドトスにとって、ギリシア人の居住地域は、世界の中心に位置する。これに対して、スキュティアは、ギリシア人にとって道の世界である北方世界の果てに位置している。ギリシア人にとっては、スキュティアは、世界の向こう側に存在する世界なのである。さらに、もうひとつの重要な対比として、農耕民と遊牧民という対立をあげることができる。スキュティア人は、遊牧民だけではなく、農耕に携わる部族も存在しており、ヘロドトスもそれは知っている。しかし、ヘロドトスは、スキュティア人をつねに遊牧民として記述し、そのイメージによってスキュティア世界とその習俗を見ようとするのである。

ヘロドトスにとって、エジプトとスキュティアは、正反対の位置に立つ世界であった。エジプトは最も暑い地域であるのに対して、スキュティアは最も寒い地域である。エジプトは、世界で最も歴史が古くて、最も古い知恵を持つのに対して、スキュティアは最も歴史の浅い土地であり、それゆえ、最も知恵がない。

---

[4] ヘロドトスは、明らかに、イオニア地方で発達していた自然哲学を熟知しており、哲学的な素養も高かった。また、彼の論考には、ヒポクラテス学派の強い影響を見ることができる。cf. Rosalind Thomas, *Herodotus in Context*, Cambridge U.P., 2000.

このような世界観は、ヘロドトスにおける世界の地理的構造に現れている。すなわち、世界はヘラクレスの柱、タウロス山脈、デルフォイ、シケリアを通る中心線によって南北に二分され、寒冷な土地と温暖な土地に対比される。また、東西を分ける中心線は、北方のイスタル（ドナウ）川と南方のナイル川によって引かれる。この二つの川は、北と南の対極的な大河であり、同じ子午線上を流れ、南北の回帰線上で西に直角に折れ、西方にまっすぐ流れていくのである。



ヘロドトスのシンメトリカルな世界
（アルトークによる図をもとに筆者が作成）

2.3 ヘカタイオス

こうしたヘロドトスの関心の背後に、当時のイオニア地方における地理学・民族学的関心が存在することは明らかであろう。

その点で注目されるのが、彼の先駆者であるミレトスのヘカタイオス（c.560-480 B.C.）である。ヘカタイオスは、アナクシマンドロスの弟子であると言われており、この時代の地理学と歴史学に大きな寄与をした人物である。アナクシマンドロスの地図を発展させ、ヘカタイオスの地図を作成した。

ヘカタイオスの地図

ヘカタイオスは、各地を旅行し、地理学的著作を残したと言われる。その著作としては、『世界周遊記（Periodos Ges あるいは Periegesis）』という題名の地理学的著作がある。これは、ヨーロッパとアジアをめぐる二巻からなるものであり、ヨーロッパ、アシア、エジプト、リビアを記述している。

この著作のヘロドトスへの影響は、とりわけ、エジプトとリビアをめぐる記述に見られる。ヘロドトスは、ヘカタイオスの著作を、いわばガイドブックとして活用し、その情報源にしたと考えられる。

さらに、ヘカタイオスには、『系譜学（Genealogiai）』（『歴史（Historiai）』あるいは『英雄学（Heroligia）』

とも呼ばれる）があり、その主題は、英雄と半神の歴史にあったと考えられている。この著作についても、ヘロドトスの宗教的研究に対して大きな影響を与えており、彼の論考を触発するものであったと考えることができる。

それゆえ、ヘロドトスは、ヘカタイオスの研究の強い影響を受けてエジプトに赴き、彼の研究を検証し、発展させようとしたのだと考えることが可能なのである[5]。

3 ヘロドトスによるエジプト調査

3.1 『歴史』第2巻の構成と主題

『歴史』第2巻におけるエジプト誌は、内容が非常によく整理され、明確な構成を持っている。

このうち、冒頭の第1節から第4節までは、この巻の導入部ともいえる部分である。まず、第1節では、キュロスの死後、カンビュセスが王位を継ぎ、彼がエジプト遠征をしたときには、自国の兵だけでなく、ギリシア人も遠征軍に加えた旨が報告されるが、その後、話はエジプト誌に移り、物語が再びカンビュセスの遠征の話題に戻るのは、第3巻の冒頭においてである。それゆえ、『歴史』における第2巻の独立性はきわめて高く、一冊の独立した論考と見なすことができるのである。

続く第2節では、エジプトの歴史の古さが話題となっている。すなわち、彼によれば、エジプト王プサンメティコスは、エジプトが全人類で最も古い民族であるか確かめるために、新生児を羊の群れの中で育て、言葉を教わらずに成長した子どもがどのような言葉を発するかという実験をおこなった。すると、子どもはプリュギア人の言葉を発し、これによって、エジプト人ではなく、プリュギア人のほうがより古い民族であることを確認したという。ヘロドトスが、まずはこのような逸話を紹介する背後には、まずはエジプトの古さという関心があるからであり、彼は、エジプトに関わる最初の相応しい逸話として、この逸話を取り上げたのであろう。

続く第3節では、エジプトに関するヘロドトスの情報源が提示される。プサンメティコス王の逸話をはじめとして、彼は、主にメンピスのヘパイストス神殿の司祭たちから情報を手に入れ、さらに、テバイやヘリオポリスにも足を伸ばして、そこの司祭たちからも話を聞き、信憑性を確かめたという。第4節で、司祭たちから得た情報のいくつかを紹介すると、ヘロドトスは、第5章からエジプト誌の本題に入っていく。

第5節以降のヘロドトスの記述は、明確な構造を持っている。まず、第5節から第98節は、主としてエジプトの国土と習慣の記述と考察に当てられている。これに続く第99節から第182節はエジプトの初

---

[5] ここから、ヘロドトスのエジプトの記述はヘカタイオスからの剽窃だという批判も生まれる。このような批判は、ポリュピュリオスの時代から存在しているが、T. S. Brown, 'Herodotus in Egypt. (1) Country', *Ancient World* 18(1988), p. 77 ff.が述べているように、ヘカタイオスの記述とヘロドトスの記述は異なっており、ヘロドトスの記述のほうが内容豊かであるといえる。How & Wells, *A Commentary on Herodotus vol.* 1, Clarendon Press, 1912, pp. 24-27 も同様に、ヘカタイオスの資料の利用は認めるが、それは剽窃とはいえないとしている。

代の王ミンから、アマシス王までの時代の歴史を、王の年代記としてまとめている。

前半部（5〜98 節）のうち、最初の 34 節までは、エジプトの地理学的問題の考察に充てられている。この部分は、大きく三つの問題が考察されている。すなわち、エジプトの国土の大きさや形状をめぐる問題（5〜18 節）、ナイル川の氾濫の原因をめぐる問題（19〜27 節）、ナイル川の水源はどこかをめぐる問題（28〜34 節）である。前半部の考察の多くは、ナイル川をめぐる問題で占められており、ヘロドトスの関心と、エジプト調査の主目的がナイル川をめぐる問題の解明にあったことがわかる。

地理学的問題の考察を終えると、ヘロドトスは、エジプトの習慣と文化をめぐる考察に入っていく。彼はまず、エジプトとギリシアの習慣が正反対であることを、さまざまな具体例を列挙して示した後（35〜36 節）、エジプトの宗教的信仰と宗教的習慣の記述を展開していく（37〜76 節）。ここでのヘロドトスの主たる関心は、動物に対する宗教的信仰と習慣、および、そうした習慣とギリシアの宗教との関係である。彼は、ギリシアの神々とギリシア人の宗教はエジプトに由来することを強調しており、彼の宗教的関心の発生源が、ギリシア宗教の問題であったことがわかる。

宗教的問題の考察を終えると、ヘロドトスは、エジプト各地におけるエジプト人たちの習俗をめぐる民俗学的記述を展開していく。彼の挙げる習俗は、結婚や食生活などの生活習慣から、占いやミイラ作りの習慣まで、きわめて多岐にわたる雑多なものであり、ここでの彼の関心が、純粋な民俗学的興味にあることがわかる。

後半部（99〜182 節）は、初代の王ミンからはじまる王の年代記であり、ヘロドトスは、王の即位順にそのエピソードを記述していくが、彼の王の年代順には、錯誤が見られ、また、適宜、多様な話題が脱線的に挿入され、考察されている。

3.2 調査旅行の時期と範囲

ヘロドトスによるエジプト調査旅行の時期や、その旅程などについては、ほとんどすべてが推測の域を出ない不確かなものであり、さまざまな説がある。

How & Wells によれば[6]、彼がエジプトを訪れたのは、紀元前 460 年以後であることは疑いない。『歴史』第 3 巻 12 節において、彼は、エジプト人の頭蓋骨は非常に硬いのに対して、ペルシア人のそれは脆いと主張し、後者の証拠として、パプレミスにおいて戦死したペルシア兵の遺骨でそれを確認したと述べている。これは、エジプトがペルシアの支配に対して叛乱を起こした際に、ナイル川岸のパプレミスの戦いに対する言及であると考えられる。それゆえ、彼は紀元前 460 年に発生したこの出来事以後に、この地を訪れていたことになる。

さらに、Brown[7]は、ヘロドトスは、この紀元前 460 年以降、アテナイによるエジプト遠征が終了する紀元前 454 年までのどこかでエジプトを訪問していたと推測するが、これはあくまでも推測にすぎず、確

[6] How & Wells, *op. cit.*, p.411.
[7] T. S. Brown, *op. cit.*, p.86.

かな根拠はない[8]。

いずれにしても、確実に言えるのは、彼が紀元前460年以後のある時期にエジプトを訪れていたという事実だけなのである。それでは、われわれは、『歴史』第2巻で行われた彼のエジプト調査が、この時期に実施されたと確定してよいであろうか。それは、難しいように思われる。というのも、ヘロドトスのエジプト調査旅行が、一回しか実施されなかったことを示す証拠は何もないからである。もしかしたら、ヘロドトスは、これ以外の時期にもエジプトを訪れていたかもしれず、それは紀元前460年以前であったかもしれないのである[9]。

旅行の時期や期間についても、推測の域を出ない。藤縄は、滞在期間が四ヶ月以下であり、洪水とするスルディユの説に反対し、滞在は長期であり、少なくとも半年以上は滞在したはずだと考えるが、この主張は妥当である[10]。藤縄が主張しているように、『歴史』第2巻におけるエジプト誌の膨大な情報を調査することは、自分の足で、おそらくは知人を頼りながら旅行をしたヘロドトスにとって、そのような短期間では不可能であるように思われるからである。

もっとも、この推測は、彼のエジプト調査旅行が一回だけであったという想定のもとで成り立つものである。かりに、彼が調査旅行を複数回実施していたとしたら、彼はそれほど長期にエジプトに滞在する必要はなかったかもしれない[11]。

3.3 エジプト調査の目的

ヘロドトスによるエジプト調査の目的は何だったのであろうか。

『歴史』第2巻の構成と内容を見ると、彼の関心のありかを見て取ることができる。すなわち、第2巻は大きく三つの部分によって構成されており、これが、ヘロドトスの調査対象であったことがわかるのである。

①まず、冒頭に展開されるのが、エジプトの地理的考察である。次に、②エジプト人たちの習慣が詳細に論じられるが、宗教、とりわけギリシアの宗教との関係性をめぐる問題が中心的な論題であるのが特徴と言える。その後、③後半部分では、エジプトの王の年代記が記述されている。

ヘロドトスは、①②の記述が終了して、③の年代記の記述に移るさいに、こう述べている。

> 「これまでは私が自分の眼で見たこと、私の見解および私の調査したところを述べてきたのであるが、これからはエジプト人の話してくれたことを、私の聞いたとおりに記していくことにしよ

---

8 How & Wells, *id* は、それ以外の代表的な説を三つ取り上げ、検討している。

9 多くの論者は、エジプト旅行は一回だけであったと考えているようである。T.S. Brown, *op. cit.*, pp. 86-87 は複数回としているが、推測にすぎない。

10 藤縄、前掲書、154頁。

11 ギリシアからどのような経路でエジプトに渡航したかについても同様である。T.S. Brown, *op. cit.*, p. 80 は、渡航ルートの候補を推測しており、少なくとも、キュレネ経由ではないとしているが、この程度の推測しかできない。

う。しかし私の実見したこともいくらかは、それに添えて述べるはずである。(99 節)」

すなわち、①②はヘロドトス自身の調査に基づく、彼のエジプトに対する考察であるのに対して、③はエジプトの司祭たちから手に入れた情報の紹介なのである。たしかに、③においてもヘロドトス自身の体験や見解が差し挟まれている。だが、大部分は、伝聞情報に基づくものであり、彼自身の調査によるものではない。

それゆえ、ヘロドトスは、エジプトの王の年代記を中心とする歴史の調査のためにエジプトに赴いたというよりは、その主目的は、①②の調査にあったと考えるべきではないだろうか[12]。

このうち、冒頭に来るのは地理学的記述であり、ヘロドトスの関心は、まず何よりもこの点にあったと思われる[13]。

2 巻 5 章で、ヘロドトスは、計測の道具を携えて船に乗り、エジプトに近づくと水深の調査をし、海底の地質を調べている。彼は、エジプトの形状とその地質を調べているが、その背後には、エジプトの三角州がナイル川の堆積によって生じたものなのかという関心があると思われる。

さらに、ヘロドトスは、ナイル川をさかのぼって、その水源の調査をしようとしている。これは、ナイル川の氾濫の原因を探るためであり、彼の調査旅行の大部分はこの調査に費やされたであろう。

他方、地理学的な関心に比較して、ヘロドトスには、神殿などのエジプトの建築物に対する関心が薄い。ヘロドトスは、ナイル川を遡上する旅行の途上で、テバイの巨大な神殿群を目撃しているはずなのであるが、『歴史』第 2 巻には、それに対する言及が見られない。それゆえ、ヘロドトスがナイル川をテバイより先にあるエレファンティネまで訪れたとか、彼がテバイの司祭たちから情報を手に入れたといった証言は、みな虚偽であるとされることもあった。しかし、藤縄が指摘しているように、ヘロドトスの関心が、現代の旅行者の関心とはまったく異なり、地理学的なところに存していたのであれば、このことには何の不思議もない[14]。

4 ヘロドトスとエジプトの風土

ここでは、ヘロドトスの調査旅行の第一の目的であったと考えられる、エジプトの地理学的考察を概観しよう。エジプトをめぐる地理学的考察は、5〜34 節において展開されているが、その主題は大きく以下の三つに分けることができるであろう。

①エジプトの国土をめぐる考察（5〜18 節）

②ナイル川の氾濫をめぐる考察（19〜27 節）

③ナイル川の水源をめぐる考察（28〜34 節）

---

[12] How & Wells, *op. cit.*, p. 413 は、ヘロドトスの目的として、1. 宗教の研究、2. 自然史の研究、3. 地理学的研究の三つを指摘している。

[13] 藤縄、前掲書、153 頁以下。

[14] 藤縄、前掲書、158 頁を参照。

以下、それぞれの主題の内容を詳しく考察していこう。

4.1 エジプトの国土をめぐる考察（5〜18 節）

エジプトの国土をめぐるヘロドトスの考察は、さらにいくつかの細かい主題に分かれている。

ヘロドトスはまず、エジプトの国土の範囲を確定し、その地勢を記述している（5〜10 節）。ヘロドトスによれば、エジプトは「ナイル川の賜物」であり、エジプトはナイル川の三角州を中心に形成されている（5 節）。その後、ヘロドトスは、エジプトの国土の大きさを記述していく。それによれば、エジプトの海岸線の長さは 60 スコイノス（3,600 スタディオン）であり、海岸線から内陸に向かうと、平坦で水の豊かな土地が続き、ヘリオポリスから置くでは、国土が狭くなり、山岳地帯となって、やがて紅海（インド洋）に達するという（6〜8 節）。

続いて、ヘロドトスは、こうした土地が形成された理由の考察を始める。彼によれば、エジプトのうち、内陸の山脈に挟まれた山岳地帯は、以前は海の入り込んだ湾であったという。彼は、これをアラビア湾に類する、陸地に入り込んだ湾であったとし、これが、川の堆積によって陸地になったものであると考えている(11 節)。以上は、彼の伝聞による意見に基づくものであるが、ヘロドトスはさらに、この推測が正しいという証拠を、みずからの調査に基づいて説明しようとする。すなわち、エジプトは、他の地域に比べると海に突出しているだけでなく、山には貝が見られ、また地表からはピラミッドが腐食するほどの塩分が吹き出る土地であり、その土は、他の地域と異なり、黒くてもろい沖積土からなっているのである（12 節)。ヘロドトスによれば、こうしたエジプトの国土の大部分は、沖積土の堆積によって形成されたものであり、土地の隆起が続いているという（13〜14 節)。

その後、ヘロドトスは、デルタ地帯のみがエジプトであるというイオニア人たちの見解を検討している（15〜18 節)。イオニア人の見解によれば、ナイル川の作るデルタ地帯のみがエジプト領なのであり、それ以外の部分はリビアかアラビアである。だが、ヘロドトスによれば、デルタ地帯は堆積によって生じた土地である以上、もしデルタ地帯だけがエジプト領であるなら、エジプト人たちはそれまでは国土を持たなかったことになる。ところが、ヘロドトスの考えでは、エジプトは、世界で最も古い民族のひとつなのである。それゆえ、ヘロドトスは、エジプト人は、国土が増大するにつれて、しだいに居住地を移動させた民族であり、それゆえ、ナイル川上流の地域もまたエジプトの領土なのである。それゆえ、ヘロドトスは、エジプト人たちの居住している地域すべてをエジプトと考えるべきだと主張している。

4.2 ナイル川の氾濫をめぐる考察（19〜27 節）

エジプトの国土をめぐる考察を終えると、ヘロドトスは、考察の焦点をナイル川そのものに移していく。

ヘロドトスはまず、ナイル川の氾濫の原因をめぐる考察を展開している。彼は、ナイル川が水嵩を増し、氾濫する原因を、エジプト人たちから聞こうとしたが、だれもそれを知らなかったという（19 節)。

次に彼は、ギリシア人によって提出された三つの説を紹介し、検討していく（20～23 節）。すなわち、①季節風が原因であるとする説、②ナイル川はオケアノスから流れ出しているのが原因とする説、③雪解けの水の流出が原因であるとする説の三つであるが、ヘロドトスは、いずれも説得力を欠く説として却下している。

まず、①については、季節風が吹かないときでも、ナイル川の水嵩が増す現象がしばしばあるという。さらに、もし季節風で水嵩が増すなら、他の河川でも同様の現象が見られるはずであるが、そのような現象を起こす河川は周辺には存在しないのである。

②については、ヘロドトスは、そもそも非科学的であるとして、一蹴している。

③については、一見もっともらしいが、見当違いの説であると考えている。なぜなら、ナイル川上流のエチオピアは、非常に暑い地域であり、雪が降るとは考えられないからである。

最後に、彼は、自分自身の説を提示していく（24～27 節）。それによれば、ナイル川が夏季のみに氾濫し、冬には氾濫が止まる原因は、太陽であり、他の川と異なり、ナイル川のみが、冬の間に、太陽の作用によって水分を奪われ、水量が減少するからであるという。

以上のように、ナイル川をめぐる以上の分析と考察には、ヘロドトスの実証的・科学的な側面がよくあらわれているように思われる。

4.3 ナイル川の水源をめぐる考察（28～34 節）

ナイル川の氾濫の原因をめぐる考察を終えると、ヘロドトスは、続いて、ナイル川の水源をめぐる考察に入る。

彼によれば、ナイル川の水源についても、正確に知っているエジプト人は存在せず、唯一水源についての情報であったサイスの書記の話も信用できないものであった（28 節）。

そこで、ヘロドトスは、みずからの調査によって得た情報を述べていく。彼は、エレパンティネまではみずから実地調査をおこなったが、それから先の流れについては、伝聞情報をもとにして、推測を進めていく（29 節）。

それによれば、エレパンティネより上流になると、エチオピア人とエジプト人の住む土地となる。流れは激しくなり、陸を徒歩で 40 日かけて通過する。その後、12 日の船旅で、エチオピアの首都に到着するという（29 節）。そこから、さらに進むと、「脱走兵の国」というエジプトからの脱走兵たちの国に到着するという（30 節）。

ヘロドトスによれば、エジプトを離れて、ここに到着するまで四ヶ月かかり、そこから先は砂漠地帯であり、不明であるという（31 節）。

だが、ヘロドトスはさらに、キュレネ人たちがナサモン人から聞いたという情報を付け加えている（32 節）。それによれば、ナサモン人のなかに、リビアの砂漠地帯を探検した者たちがおり、彼らが砂漠地帯を探検しているときに、西から東に向かって流れる、鰐の生息する大河を目撃したのだという。

この情報を受け、ヘロドトスは、この大河がナイル川であると推測し、ナイル川はリビアに発して、リビアを横切る川であって、イストロス川（ドナウ川）と同じ位の距離にその水源があると推測している（33節）。

ヘロドトスは、推測に推測を重ねて、ナイル川の流れを考察しているが、彼の念頭には、ヨーロッパを流れる大河であるドナウ川との対称関係があり、そこから、ナイル川の流れを考えている。ここには、ギリシア人たちの世界を中心にして、地中海を横切る東西の中心線を設定し、北側の世界と南側の世界にシンメトリカルな対象性が成立すると考えるヘロドトスの世界観が、如実に反映されている。

5 ヘロドトスとエジプトの文化

5.1 エジプトの風習をめぐる記述の特質

エジプトの風習をめぐるヘロドトスの記述は、スキュティアの風習をめぐる記述と共通する特徴を持っている。すなわち、ヘロドトスは、スキュティアと同様に、エジプトの文化を他者として記述しているのである。

エジプトの風習において際立つのは、その反対性である。この反対性は、エジプトの風習のあらゆる面に渡っている。ヘロドトスが挙げている具体例は、下記のように多岐にわたる。

反対性の具体例（35～36節）

・女は市場へ出て商いをするのに、男は家にいて機織をする。
・機織は、他国では横糸をしたから上へ押し上げて織るのに、エジプト人は上から下へ押す。
・荷物を運ぶのに、男は頭に載せ、女は肩に担う。
・女は立って用をたし、男は座って用をたす。
・屋内で排便し、戸外の路上で食事をする。
・女は決して聖職につかず、司祭は男子が務める。
・親の扶養は娘に義務があり、男は強制されない。
・司祭は、他国では長髪であるが、エジプトでは髪を切り落とす。
・服喪のとき、他国では死者の近親は頭髪を刈るが、エジプトでは髪と髯をのばす。
・他民族は家畜と別に生活するが、エジプトでは、同居する。
・他国では、小麦と大麦を主食とするが、エジプトではオリュラという穀物を食べる。
・エジプト人は穀物は足でこね、泥は手でこねる。
・エジプト人は、陰部の包皮を切取るが、他国人はそのままにする。
・男子は着物を二枚重ね着するが、女は一枚しか着ない。
・他国人は、船の帆を操作するための綱と、綱を通す環を、船体の外に付けるが、エジプト人は内側に付

ける。

・ギリシア人は、文字を書くとき、左から右に書くが、エジプト人は右から左に書く。

・エジプト人は、神聖文字と通俗文字の二種類の文字を用いる。

以上は、ヘロドトスにおいて特徴的に現れる「ひっくり返し（inversion）」と呼ばれる対立思考であり、他の文化を理解する際にも多用される思考法であるが、エジプトの文化においては、その点が特に顕著であるといえる。

エジプトの場合、習慣が反対であるだけでなく、その反対性の結果として、文化内での男女の役割なども逆転しており、ヘロドトスが、エジプト文化を、徹底的な反対思考によって理解しようとしていたことがわかる。

このようなエジプトの文化の特徴づけの背後には、ヒポクラテス的な環境的民族論が存在していると考えられる。特に、ヘロドトスは、ナイル川がもたらす風土の特異性と、エジプト文化への影響を考えており、ここでも、地理学的考察と民俗学的考察が連関しているのである[15]。

5.2 エジプトの宗教をめぐる考察

エジプトの習慣をめぐる記述の後、ヘロドトスは、エジプトの宗教をめぐる記述をおこなっている（37～76節）。

このエジプトの宗教をめぐる考察は、たんなる民俗学的関心によるものではない。なぜなら、ヘロドトスは、ギリシア人の宗教を、エジプトに由来するものとみなし、その関係性を、動物に対する宗教的信仰の分析をもとにして、明らかにしようとしているからである。

まず、ヘロドトスが取り上げるのは、牛に対する宗教的信仰と宗教的儀式である。彼によれば、エジプト人たちは牡牛をアピス神に捧げられた聖なる獣と見なしており、そのため、牡牛が犠牲のために適したものか否かを慎重に検査する（38節）。犠牲獣として適格な牡牛は、エジプト人独特の風習によって生贄にされ、その体は焼かれる（39節）。だが、イシスの聖獣である牝牛は犠牲にせず、大切に崇拝し、死んだ後は丁重に葬られるのである。

その後、ヘロドトスは、羊と山羊の犠牲を取り上げるが、これらの動物に対する信仰は、ギリシア人の信仰とも関連を持っている。なぜなら、これらの動物が捧げられる神々は、ディオニュソス、ヘラクレス、ゼウスなどのギリシアの神々と重ねられるからである。ここから、ヘロドトスは、エジプトにおけるギリシアの神々の信仰を詳しく解説していく。

まずは、ヘラクレスである(43～45節)。ヘロドトスによれば、ヘラクレスは、もともとはエジプトの神であり、その名も、ギリシア人がエジプト人から引き継いだものである。また、山羊に対する信仰は、エジプトにおけるパン信仰に関係している（46節）。また、一般には、エジプトでは豚と犠牲に捧げること

[15] 藤縄、前掲書、163頁を参照。

は禁じられているが、エジプトにおけるディオニュソスの祭りでは、豚を犠牲に捧げることが許されているという（47～49 節）。

こうして、ギリシアの神々とエジプトの神々の密接な重なりが明らかになると、ヘロドトスは、ギリシアのほとんどの神々の名は、エジプト由来のものであり（50 節）、神の名だけでなく、宗教的な風習や密儀の習慣も、エジプトから入ってきたものであると主張する（51 節）。

また、ギリシアの神託についても、もともとエジプトにおけるテバイのゼウスの神託所の巫女が、誘拐され、ギリシアに売られてきたことがその由来であるという（54～57 節）。

さらに、ギリシアにおける国民的大祭もまた、エジプトに由来するものであるとされ、エジプト各地における祭りの様子が記述されている（58～64 節）。

以上のように、ヘロドトスは、エジプトの宗教的信仰とその風習を、ギリシアにおける宗教よりも古い起源を持つ源流であると見なし、その関係性を明らかにしようとしている。

5.3 エジプトの古さとギリシアの新しさ

ヘロドトスにとってエジプトの文化が重要であったのは、スキュティアと同様に、それがギリシア文化を映し出す鏡としての他者であったからであるが、その鏡としての特質は、スキュティアの場合とは異なっているように思われる。

エジプトの場合、対立を作り出すのは、歴史の古さと新しさである。エジプトはきわめて古い歴史を持つ古い文化としてイメージされるのに対して、ギリシアの文化は若く、つねに若さを保つものと考えられている。これは、ギリシア人たちの共通のイメージであり、紀元前四世紀のプラトンの時代まで継続しているものである。

たとえば、プラトンの作品『ティマイオス』において、プラトンは登場人物のクリティアスに、彼が聞いたソロンをめぐる逸話を紹介させている（*Tim.*21a ff.）。それによれば、エジプトのデルタ地帯にサイスという都市があり、ソロンがそこに赴いたとき、彼はサイスの神官に対して、ギリシア世界における古い時代の物語を話した。すると、神官はソロンに、「おお、ソロンよ、ソロンよ、あなた方ギリシア人はいつでも子供だ。ギリシア人に老人というものはいない」（22b）と語りかけ、ギリシア人が知るよりもはるかに太古の出来事を語り聞かせたのである。

ヘロドトスもまた、エジプトの文化を古いものと考え、ギリシアの文化がエジプトに負っていることを強調する。

じっさい、ヘロドトスは、エジプトの歴史が極めて古いものであると信じている。エジプトの司祭たちの語る王の年代記に対して、ヘロドトスは、それが極めて古いものであることを強調しようとする。彼によれば、初代の王ミンから、セトス王まで、341 世代であり、3 世代を 100 年として、11,340 年の年月が経過しているという。これは、実際のエジプト史からすれば、あまりに大きな誇張であるが、ヘロドトスは、エジプトの歴史が実際にそれほど古いものであると信じていたのであろう（142 節）。

エジプトとギリシアの歴史の長さの大きな相違を示すエピソードが、これに続く、ヘカタイオスの系譜をめぐるエピソードである（143 節）。

ヘカタイオスがテバイに赴いたとき、彼は、司祭たちに、自分の系譜は 16 代続き、その先は神に連なると述べた。すると、司祭たちは、彼を神殿の広間に連れて行き、そこに並べられた司祭たちの祖先の木像を数え上げていった。その木像は 345 体あったが、司祭たちは、それはいずれも、ギリシア語で「立派な人」を意味する「ピローミス」であり、祖先が神々にさかのぼることはありえないと反論したという。

ヘロドトスもまた、この木像をテバイの司祭たちから見せられており、このエジプトの系譜の古さは、ヘロドトスが捏造したものではない。むしろそれは、エジプト人たちの自己認識を示すものといえるのである。

5.4 エジプトとギリシアのヘラクレス

ヘロドトスは、このエジプト人たちの自己認識を認め、それをギリシアの自己認識と対比させている。だが、そこには、たんなる連続的な影響関係ではなく、両者の間の差異性が設定されているように思われる。

この点は、ヘラクレスをめぐる考察（43～45 節）に、典型的に現れている。すなわち、ヘラクレスに相当するエジプトの神とギリシアのヘラクレスには、決定的な差異が見られるのである [16]。

ヘロドトスによれば、ヘラクレスという名前はエジプトに由来するものである。ところが、ギリシアにおける英雄のヘラクレスに対して、エジプトのヘラクレスはエジプトの十二神に属するきわめて古い神であり、その素性には大きな違いがあるというのである。

ヘロドトスの調査によれば、フェニキアのテュロスのヘラクレス神殿に祭られているヘラクレスも古い神であり、それゆえ、ギリシアにも神としてのヘラクレスと、半神としてのヘラクレスが存在しているのだという。

以上のヘロドトスの考察は、同じヘラクレスであっても、ギリシアには、エジプトに由来しない系譜の信仰が存在していることを示しているといえるだろう。

このように、ヘロドトスは、ギリシア世界が、エジプトの強い影響のものに成立したものと考え、そのアイデンティティの源をエジプトに求めようとしているのであるが、その影響関係は、たんなる模倣ではなく、ギリシア世界の独自性が反映されたものだといえるのである。

5.5 ホメロス批判

ヘロドトスの新しい歴史理解は、ホメロスへの批判にも現れている。すなわち、ヘロドトスは、ヘレネ

---

[16] この点については、T. S. Brown, 'Herodotus in Egypt. (2)The People', *Ancient World* 18(1988), 89-98 および、I. S. Moyer, 'Herodotus and an Egyptian mirage: The genealogies of the Theban priests', *Journal of Hellenic Studies* 122 (2002), 70-90 を参照。

をめぐる長い考察を展開しており、そこで、ホメロスの見解を批判しているのである[17]。

エジプト王の年代記の中で、ヘロドトスは、プロテウス王を祀る「異国のアプロディテ」と呼ばれる社について言及している。ヘロドトスの推測によれば、その社は、じつはヘレネを祭る社である。というのも、ヘレネがプロテウスのもとに逗留したという伝承が存在しており、また、アプロディテの社で「異国の」と限定されているものはほかに存在しないからである（112節）。

彼は、この伝承を、司祭たちから聞いたのであるが、その話は次のようなものであったという（113～115節）。すなわち、パリスは、スパルタからヘレネを奪い、母国に向かったが、エーゲ海に出ると船が風で流され、エジプト海に入ってしまい、ナイル川の河口の町に漂着した。ところが、そこで、パリスの従者たちが主人に対して謀反を起こし、主人を落としいれようと、主人の所業を触れ回った。その情報を知ったプロテウス王は、パリス一行を捕らえて、メンピスに連行すると、ヘレネを保護し、パリスを国外追放にしたのだという。

この伝承を受け、ヘロドトスは、ホメロスに対する批判を展開していく。ヘロドトスによれば、ホメロスの作品には、この事実をうかがわせる記述が見られ、ホメロスはこの事実を知っていたはずである。ところが、ホメロスは、それを無視して、より叙事詩向きの物語を作り出したのだという（116節）。

さらにヘロドトスは、司祭たちが直接メネラオスから聞きだした話を紹介している。それによれば、ヘレネを取り返しにイリオンを攻め落としたギリシア軍は、ヘレネがエジプトにいることを知り、メネラオスをエジプトに派遣する。だが、プロテウスからヘレネを帰してもらったメネラオスは、悪天候を鎮めるために現地の子どもを人身御供にしてしまい、人々の反発を買って、逃げ出したのだという（117～119節）。

こうして、エジプトの司祭たちの話を紹介した後、ヘロドトスは、司祭たちの話が真実であることを示す証拠として、自分自身の推理を二点述べている。

①もし、ヘレネがイリオンにいたとしたら、パリスの意志に関わらず、ヘレネは変換されていたはずである。なぜなら、パリスの希望のために、ギリシア軍と戦い、多くの犠牲を払うような愚かな判断を、プリアモスがするはずはないからである。

②トロイアの王位は、実際にはヘクトルが次ぐことになっていた。そのヘクトルが、トロイアの国民を危険にさらしてまで、弟の言いなりになるはずがない。

このように、ヘロドトスのホメロス批判は、非常に実証的であり、かつ論理的なものといえるであろう。ここには、紀元前5世紀における新しい歴史意識がみられる。それは、歴史の人間化といってよいものであり、以上のヘロドトスの批判には、それが如実に現れているように思われる[18]。

6 まとめ

以上、われわれは、ヘロドトスにおける異文化理解の枠組とその特徴を、『歴史』第2巻におけるエジプ

[17] cf. T. S. Brown, *op. cit.*, 93 ff.
[18] cf. I. S. Moyer, *op. cit.*, 318-9

ト誌の記述をもとに考察してきた。前号におけるスキュティアと同様、ヘロドトスは、二項対立やひっくり返しなど、アルトークの言う「他者のレトリック」の手法を駆使して、エジプトを描写し、理解しようとしている。

しかし、エジプトをめぐる記述においては、スキュティアとは異なる特徴が見られることが明らかとなった。すなわち、その根底には、紀元前5世紀におけるイオニアの学術的関心が流れており、彼は、その伝統の中で、新しい歴史的探求と歴史的記述の模索をしているのである。ヘロドトスは、まさに、イオニア文化の伝統が生み出した思想家なのである。

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的基盤形成支援事業（平成25年度～平成29年度）」によって行われた。